

*今月号は私が担当しました。



営農振興課
営農経済渉外係
近藤 慎太郎

ネギの軟腐病について

5月に入り、気温の高い日が多くなってきました。これからの時期の高温・多湿は、ネギの生育停滞や病害虫の発生を助長する原因となります。昨年は異常な高温に加え、JAふかや管内でも局所的な豪雨が見られ、軟腐病が多発しました。今回は、軟腐病について改めて紹介します。

軟腐病について

①症状

葉身の地際部が水浸状となり、やがて内部が軟化・腐敗し、独特な悪臭を発します。

②多発する条件

26℃以上の高温。排水不良に

よる多湿な圃場で多発します。

③特徴・特性

土壌伝染性の病害のため、高温・多湿時に傷口から病原菌が侵入することで発病します。そのため、傷口を作らないよう管理することが重要となります。

傷口を作りなすためのには

ネギは主に、根が傷むことで傷口ができてしまいます。降雨による排水不良で圃場が多湿になると、根が酸欠状態になり、根腐れの原因となります。圃場に明渠等を設置し、排水対策を万全にしましょう。また、酸素供給剤を使用することで、根腐れの軽減や回復を助ける対策となります。

管理機等で土寄せ作業を実施した際にも、根が爪で切断され、傷口ができてしまいます。そのため、高温・多湿時の土寄せ作業は避けた方がよいでしょう。

また、害虫による被害も傷口ができる原因となります。特にネダニは土壌中で根を加害するため、注意が必要です。ネダニの防除を行うことは軟腐病の対策にもなります。

薬剤による防除

軟腐病は細菌性病害のため、発病後に治療することは困難です。そのため、薬剤の使用は発病前の予防が基本となります。

まとめ

軟腐病防除の殺菌剤には、一般的に銅剤が多く使用されています(表)。銅剤は植物の表面を銅で覆い、傷口を保護することによって病原菌の侵入を阻止します。ただし、高温時には薬害が発生しやすいため、注意が必要です。

今回は軟腐病について取り上げましたが、ネギ栽培を取り巻く病害虫はその他数多く存在します。気温や天候、また圃場を定期的に観察し、早めの防除ができるように心がけていきましょう。

表 ネギの軟腐病に登録のある薬剤例 (2025年4月7日現在の登録状況に基づいています)

作用機構分類 FRACコード	薬剤名	希釈倍率・使用方法	使用時期	使用回数
M 1	Zボルドー ※	500倍~1000倍	-	-
M 1	ヨネポン水和剤	500倍	収穫7日前まで	4回まで
M 1・24	カスミンボルドー	1000倍	収穫14日前まで	2回まで
31	スターナ水和剤	2000倍	収穫7日前まで	3回まで
U18	バリダシン液剤5	500倍	収穫前日まで	2回まで
P02	オリゼメート粒剤	6kg / 10a 株元散布	土寄せ時但し 収穫30日前まで	2回まで

※ 野菜類で登録

農薬を使用する際は必ず使用農薬のラベルを確認しましょう。